

武家名目抄

職名部十二上

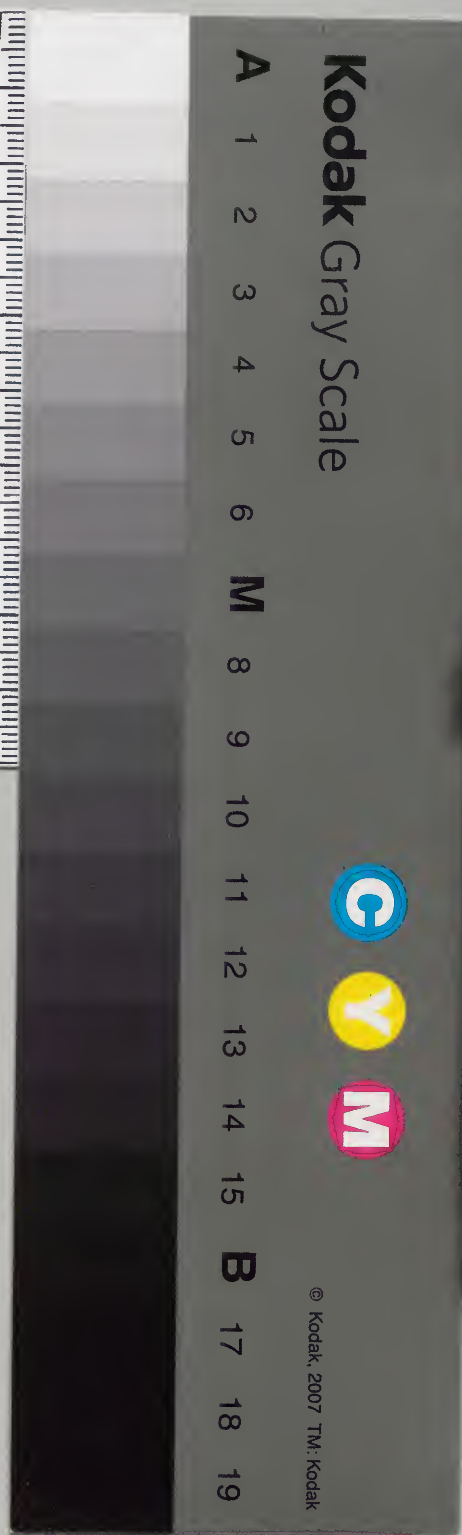
第廿三冊

内閣文庫		
和	三六〇九一	冊
書	六〇	冊
類	五三函	冊

内閣文庫	
番號	和 36091
冊數	60 (23)
函號	153 276

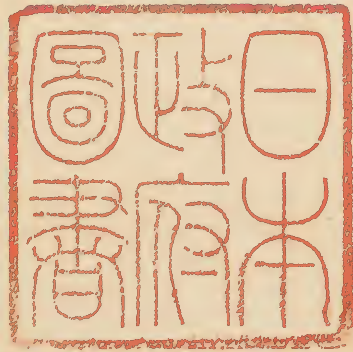
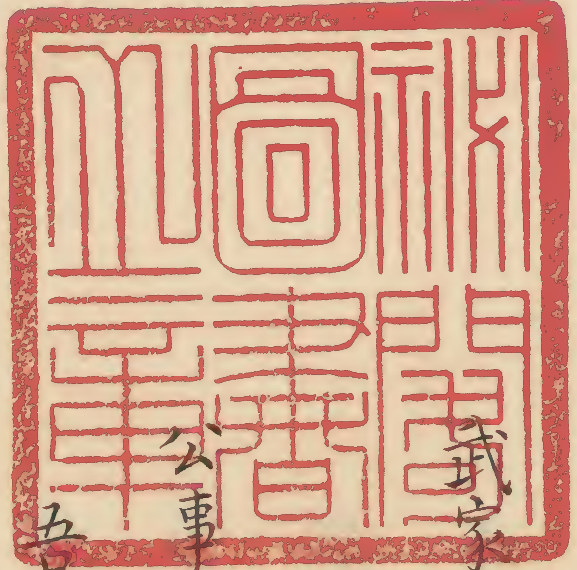
153-276
(23-40)

共六十



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

276



武家名目抄第廿三冊

職名部十二上

公事奉行人 又稱御物沙汰衆

吾妻鏡云建久二年正月十五日甲子被行

政所吉書始云、政所別當前因幡守平朝

臣廣元令主計允藤原朝臣行政案主藤井

俊長知家事中原光家問注所執事申宮大

夫屬三善康信法師侍所別當左衛門少尉

公事奉行人 又稱御物 恩澤奉行 又稱勲功奉行

恩賞奉行 又稱御 安堵奉行

賦別奉行 又稱賦 披露奉行

問注奉行

平朝臣義盛所司平景時公事奉行人前掃
部頭藤原朝臣親能筑後權守同朝臣俊兼
前隼人佑三善朝臣康清文章生同朝臣宣
衡民部丞平朝臣盛時左京進中原朝臣仲
業前豐前介清原真人實俊

又云建曆二年九月廿六日己巳御物沙汰
衆就奉公勤厚賜祿物是月迫冝式也而去
年事延引

又云天福元年十一月十日今日有評議及
晚更訖武州令還御亭給之後招大和守倫
重玄蕃允康連民部丞業時等賜盃酒公事
之間致勤厚殊神妙之由褒美給是近日雜
訴等事相積之間連、有評議每度武州早
參給人、面、欲倒衣奉先立之仍此三人
令談合日夜中參候于評定所至翌朝奉待
彼御參更既及五六之間預此御感

又云寛元元年二月廿六日癸酉諸人訴論

事為無成敗懈緩今日於左親衛御亭有沙

汰且被點其日、被結人數定御物沙汰日

結番事一番三日九日十三日攝津前司若

狹前司下野前司對馬前司太田民部大夫

二番四日八日廿日佐渡前司基綱太宰少貳出羽

前司清左衛門尉三番六日十四日十九日信

濃民部大夫行盛入道甲斐前司泰秀秋田城介加賀

廿三之二

民部大夫右守次第無懈怠可被參勤之狀

如件仁治四年二月日按結番の事皆詳定流り

季瓊日録云長祿三年十二月廿日依馬淵

被官人永原公事可有御糾明之相奉行之

支飯尾加賀守伺之

樵該治要云凡在行人天下此公事と云

おころふ職多ふりて政道忠告悪

とてこれより後一以つふ心正也

ふしし私成存を以て悪白をわきまへ理形を
備うともより 眞眞成いふさけら舞をよれ
を以人と称さるる一と一又を以人と一して
眞眞をいふ一と一のさうちよふされたる公事
も一と越訴をたてしりさむ事一と其咎あふ
るるる

甲陽軍鑑云 信玄代惣人数條 公事を行今福淨閑

武藤之河守梅井安菟予右三奉行用周公

吐握陣留すふハ諸義のお流同安をうけ
しり同安策に入重也

按鑑倉右大將家武家草創のころ先府を
東関了りしき政取同注不侍不等れ諸司を
さるるり治勢を施行せし正統中政不
朝家其大政官志如くにして幕下其命令
武家の庶務ふへてさるるあつるさるる
ゆく同注不ハ訴訟裁判其事成はるるを侍不ハ

由家人諸侍れを退を授けしめて形を以
授断り此時又更し公事を行人成を
是は政不同河所の可司と共は政理成り多すけ
命令を承りしるものあり是時上而て麾下に
諸侍ハ悉武苑を中とし汗馬其功ありし
いしも素より文事不ありしを以て治務を
承りし使形しるを以て中京清原三岳後京
等此諸氏明経の法の乃通し或ハ算筆此

承りし孰ゆる輩を京師に招き福をあつし
家人不列し府務を施行せしむ政不同河所
公事を行人忠輩皆是なり只侍而武士を
指揮し致言書を授けしを以て武勇の輩その
職に補せしむ武を以て礼を治免文を以て
成をせしむる自然其理は出るとえし
公事を行人成はしる事一なりしを以て
ありし廣く公事を以て稱せしむるは然れし

正しき職名ありさうふ依て常は六ふしう
奉行人とのこいつて後評言引身志あるを
役け政取回注所れ支那人を志さく不及さ
輩ふとしく公事をせしむ友ふを以の真倍増
せりその内より諸事此を以小定免らふ時
或は懸澤を以又ハ安堵を以回注を以等れ
称ありを以下此諸を以皆是なる
諸を以の内
常日て職成
攝るも何そ又臨時に命さるも何りて一極あり但
後世にいつて役するを以及大名一家此を以ハ例に
つり

或ハ六れ事を以物沙汰元とも称す由物ハ公事此

之小通一 在世話用といふ辭
大くこれ類せり 沙汰ハ事以の成

うよハふり 吾妻鏡弘長三年十二月十六日の條に
六波羅陸奥丸を大支將監時茂朝臣

歸法是依最明と殿あり奉向而不可緩由物沙汰由
作出し同揚鞭を以とつて時ハ六波羅の控頭より
以人を指揮するものあれハ関東に逗留する時ハ政務
遅滞は多し依て急し由法を以あり又浩材の由惠
上人傳ふ六波羅に系りり折長春時朝臣物沙汰して
傳ふ座せられありさう奉時朝臣頼下涙を押し拭く
中はれりふさめ此の物沙汰ハ柳も私なく理の修り
行むはく罪にこそあるはさきよていやらんさうと
これに以て由物沙汰ハ公替 さあ何さう公事
執行志

内小訴訟裁判ありハ人庶乃浮沈マカク孝
天下レ瞻望ミテ不_レ可_レトシテ政務ノ才一_レ不_レハ
俗間ノ公事トシテ必_レ訴訟ノ才ニ限_レル不_レ
辯ノ如クふる由キ多_レハ是利敵ノ時ハ亦_レ仍
人ノ才_レ公事ヲ行_レ由物沙汰_レ不_レハ不_レ辯ハ
絶_レテ然_レモ_レ公務_レ執行_レ不_レ可_レト_レモ皆
總念_レ如_レ例_レ倣_レ一_レ理_レ 總念_レ如_レ世_レノ新_レ論_レ人_レを_レ同_レ注_レスル
者_レを_レ同_レ注_レスル_レト_レ不_レ是_レ利_レ敵_レ
ト_レリ_レテ_レハ_レモ_レト_レモ_レ不_レ可_レト_レモ
於_レ同_レ注_レヲ_レ行_レ條_レ注_レセ_レリ かく_レ公_レ事_レト_レシ_レ不_レ可_レト_レモ

訴訟小限_レル_レハ_レト_レモ_レ一_レト_レモ_レ大名_レ諸_レ家_レト_レモ
公事_レ奉行_レト_レシ_レ方_レ不_レ少_レ稱_レス_レ職_レ掌_レハ_レト_レシ_レテ
訴訟_レ裁判_レノ職_レト_レス_レル_レ 甲_レ陽_レ軍_レ鑑_レト_レス_レル_レト_レモ
ト_レノ_レ即_レト_レス_レル_レ但_レト_レモ
ト_レモ_レ今_レト_レ於_レ公_レ事_レト_レシ_レテ_レ政_レ務_レハ_レ無_レ名_レト_レモ_レ畢竟_レ武_レ家_レ
ト_レモ_レ世_レ俗_レノ_レ辯_レト_レシ_レテ_レ訴訟_レト_レ限_レル_レ如_レク_レト_レモ_レト_レモ_レト_レモ_レ
於_レ公_レ事_レト_レシ_レ人_レ條_レを_レ公_レ考_レス_レル_レ

恩澤奉行 又稱勲功奉行

吾妻鏡云文治五年十月五日辛卯有手越
平太家綱之者征伐之間候御共募其功可

被行賞之由言上且賜駿河國麻利子一色
招居浪人建立驛家云々仍任申請之旨被
仰下為散位親能奉行早可充行之趣下知
内屋沙汰人等

又云建久四年正月廿七日乙未安房平太
以下輩浴新恩廣元行政奉行云々十一月
卅日癸巳人々浴恩澤因幡前司廣元民部
大夫行政大藏丞賴平等奉行之六年九月

廿三日甲辰御家人多以浴新恩廣元行政

賴平等奉行之

按廣元ハ政所別當行政ハ政下令あり
賴平等ハ武友氏の始祖にして行政を障

あふ時ハ政下令ハもつて給あり一人あり
子孫お續きもつて忠職代はせり

又云元久元年五月十日壬申伊勢平氏等

追討賞事有其沙汰廣元朝臣問注所入道

等奉行之

按問注所入及問注所執事
三若庸位入道若位あり

又云嘉禎元年九月十日庚午長尾三郎兵

衛尉光景雖致度々勲功未預恩賞事駿河

前司義村并同次郎泰村属恩澤奉行後藤
大夫判官基綱頻執申之仍有沙汰可有勸
賞之旨被仰付基綱二年八月卅日甲寅於
新造御所有恩澤沙汰大膳權大夫師員奉
行之按基綱師員
共以評定元
又云曆仁元年十二月十四日丁巳今日評
定云、其後匠作前武州被參御所有恩澤
沙汰基綱奉行之

又云仁治二年九月三日戊子信濃國住人
奈古又太郎者承久三年大亂之時乍施勲
功漏其賞由頻雖愁申之依無便宜之地空
送年序訖但猶雖有如此不幸之類於奈古
軍忠者勝其中之間相構可被行賞由故匠
作氏遺命也仍左親衛為不違其趣今日執
彼款狀加別御詞被仰遣恩澤奉行人師員
朝臣之許師員申御返事云奈古又太郎申

勲功賞支折紙給預候畢早可申入候恐、
謹言七日壬申有臨時評定為出羽前司行
義奉行細工所輩恩澤事有沙汰野世五郎
拜領相摸國横山五郎跡新田垣内等按此
評定元
あり

又云寶治元年九月十一日辛酉筑後左衛
門次郎知定捧和字款狀是愁漏合戰賞事
也云、左親衛數返披覽之知定已述獲麟

一句何無其沙汰哉仰勲功奉行人等究淵
源之後可披露評定次之由直令示付詠方
兵衛入道給

按恩澤奉行或ハ勲功を以ともソ此職を
勲功れ大小と考へて恩賞の厚薄を定免はて
新恩此地をふけはるはきふれハ其職掌轉き
了りて以友ノ種余殿の初政ノハ政所別當令
及同江新執事等れ如き宿老の掌するを

ふさ祿てふよを以て人を以て定免さるる一なり
後赤祿中評定元を以て及て後後基總
て一を以て職を命せられてより以來評定元忠
内ふくまきをうけ給ふるさくふれり早竟
引身元を以て任用せしむるも一も其職掌哉
重くせしむる一あるも一足利殿の時恩賞
奉行さしむるの即ふれを以てしるるも
人数も増加し職掌もや異なりこと何れも

時世福りく損益さるる事あり何れは
難し

恩賞奉行 又稱御前衆

庭訓往来云寺社評定者就本所奉達被是非
越訴後勅依抄題後領与奪は執りて奏支於
庭中家督恩賞方法親式不可勝計也

祇園修行日記云康永二年十月十八日治
部兵衛大夫依恩賞奉行事新曲露顯之間

被止出仕上所帶被收公猶可被處重科之
由有其沙汰之旨近日風聞了

建武或曰追加之庭中篇目曰或一本所寺社

領事方之施行停滯以人并事以緩急也空

經廿七日者但本系宜經去所嚴密道行之

可申左右之由是日限可作本引身方但有限

日數之方諸方難學亦猥及濫訴者暫可被關

彼訴訟也一恩賞遲引事忠節拔群之孝熟功

賞遲引之族理訴沈論云之宜諸訴可被修身以
人子細因和

又云文書係失半訴訟事貞和二年九月廿七評定了為内論

方所替之由先日雖有之沙汰於建武二年已和

分去半事書之寫委細之名趣多據札以款

但先例為同當知行之實否於有說人等者

須成賜給失安堵由下文至同年已來亦在舊規

於事書在取恩賞方安堵可有其沙汰為次不知

仍地事於内務方且亦仍当时之領主之記跡
可足水 抄内該方ハ引付
元をいふあり

後愚昧記云貞治五年八月十八日大夫入

道没落以後奉行人等少々有黜陟沙汰改

所執事代日来齋藤五郎左衛門尉季也而

改替齋藤藤内右衛門入道被補云々又依

田左近大夫中澤掃部亮等被除恩賞奉行

云々 按大夫入道ハ依々本之氏入道
乃譽形也當時補定元の上首也

大又入道ヲ高氏ハ初ハ
云ハハ非ナリ此ハ初ハ
又高氏入道乃初ハ

花營三代記云應安二年十月廿七日中條

兵庫頭入道飯尾美濃守加恩賞方五年

三月十二日佐々木治部少輔恩賞方出仕

始六年六月廿六日飯尾左近入道圓耀被

召加恩賞奉行訖同七月二日出仕始

尊卑公脉云齋藤基能藤内右衛門尉法名

玄觀引付頭評定衆政所執事代應安五正

十一恩賞奉行 按花營三代記ハ此の日評定
元ハ補々々々々々々々評定元也

早く即日恩賞方より加らりし
所よりかく記をしなむる也

花營三代記云康曆元年五月十一日門真
外記被召加恩賞奉行七月廿五日任左衛
門尉八月十日出仕始也

齋藤親基記云文正元年二月十七日法恭沙汰始

所唐管領酒掃雲禪因州領事次牙野州

真基玄良 以上武評定也思
愛方着座未法免 諏信州志郷松丹州

秀興肥州之種法泉真秀飯玄大真有飯和元連

齋曰右種基親基齋五名豊基飯曰左為衡
依欵樂不系元治河國通飯新左為脩二年二月

十日法武初也秀教 廿九
歲 飯尾其人依任式布施

下野若十郎英基 任彈
正忠 被召加恩賞方飯總州中

沙汰也秀教于時為使節作別在國留与之百也

卷川親元記云文明十七年八月四日壬午 闕
文 飯尾

加賀与清房法八郎左衛門尉真枝中法備与子之繼

飯尾与三左衛門尉為規 還
依 松田左衛門大夫長秀 還
依

松田對馬孫三郎英致還飯尾新右衛門尉兼連

還以上十七人恩賞方衆津前未系元矢野長門

入道之雄俗名種倫兼發新右衛門入道余久俗名

基教入治初四郎左衛門通種還源方孫次郎

長直還依田中務丞光朝還飯尾四郎右衛門尉

種真還飯尾右系亮真永還清四郎真春還

雜賀孫次高行還松田八郎秀孝還齋友四郎

基聰同孫友民初五基紀同松田九郎賴亮同

飯尾又六真連同飯尾彦次郎為弘同該方次郎

貞就同飯尾孫三郎元清同飯尾孫六同飯尾

彦三郎為完同松田又八郎秀續同治初四郎

貞兼同以上廿五人十五日癸巳奉行元出仕

飯尾大和入為清備中入道齋藤大茂入為清

或部大丈飯尾英忠入為飯尾左衛門大丈該方

信濃守松田對了寺飯尾與三左衛門尉松田

左衛門大丈飯尾之節右衛門尉松田對了孫三郎

飯尾新左衛門尉以上御前衆は元未系元矢野

長門入道治新正尉自餘畧之○按に日條と十五條とを合考すれば

恩賞方元を多て十七人あり由元元とは即恩賞方元を多て十七人あり由元元とは即

惠林院殿將軍宣下記云延徳二年七月五

日丙辰御判始宣下事終之後被執行之中

次御前御沙汰始管領以下着裏打叅候同

于御評定之儀式號恩賞御沙汰御評定但

雖有御評定着座御免到御前御沙汰着座

者一段之儀也經一兩年有御免也恩賞方

衆號御出仕先着貢馬間之次座敷今日御

祝儀繁多之間不移時刻可被行之旨依被

仰出各不改大帷着座也一列伺事在之元永

數秀清房三人着御寄進奉行兼連大帷最

前伺之披露状山城國上桂薦淵跡名田畠

事石清水八幡宮可被成御寄進御判也次

一列伺事條數各一箇條披露様同奏事人

數打裏清式部筑後守元定松田丹後守長秀
諏方信濃守貞通齋藤大藏入道玄茂紺直
中澤備前守之綱飯尾左衛門大夫為規飯
尾筑前守種貞雜賀民部丞高行清式部四
郎左衛門尉貞數飯尾兵衛大夫春貞齋藤
民部大夫宗基松田左衛門大夫頼亮飯尾
近江守貞運松田主計大夫英致飯尾三郎
左衛門尉為完諏方左近大夫貞說飯尾彦

左衛門尉行房飯尾次郎左衛門尉為頼矢
野長門守貞倫一昨日新加

年中定例記云正月四日此對面乃次才一番

此身固とつて在實御此由人系二番とめん

中次中て爰飲之外此お伴元此系外換かゝ此供元
三番小大外換熱書元加治を此元此系元上極
此披官松波六郎左衛門尉號補山田之外執多判友

大徳亮所くす——又樂人修く

按恩賞奉行乃名を建武村以より是を元
而總念此恩沢奉り——て其職掌大なる前に
注せざるふ——但是利敵の時、其執務其の倍増
せし——先代は恩澤奉行一人よるより其
爰小なりて其く人数加倍せり初免小條家
其祀を絶——公家一統の政替小復せり時
武家村制度とし深用有り其新に恩賞方

其建武を元其堂と地下十七人をして其元元元らま

とす 建武年間
記に之を 思ふ小かく数人を並れし其元元元大祀此

後之武何れも勲勞ある者多きを以て恩賞の沙汰

殊に繁く利神社佛寺等よるすて新恩此地を

寄附すること其小絶されはるふ—— 其各執務
寺社の舊記

文書よるも總念此世に其恩沢奉行其社儀を預り沙汰せし
事いすも其元元元——とも新念等其功よりて新に
寄附せしるをいす 其利敵武村其堂極あり——

後之暫く其諸國全く靜謐に屬をさるりしれ

恩賞の沙汰於繁くは社儀等をなすはるるも
亦建武の制度に異ならずれは其職務僅
ある人の堪る所は其を以て評定引付あり其内
より十餘人取撰むる恩賞方より奉補して
事を辨じし凡引付の政人を帯て評定元ハ
更ふも其餘政人あり其輩も他は持職ある
そのハ皆恩賞方より列して事は従ふあり其
他の持職を政所同注されぬ執事
評定元ハ職評定元ハ其れを以て又政所同注あり候

替ふはてれを以人も引付元ハ補きし其時の数年
ありて必恩賞方小加へらるるの故に評定元ハ
外恩賞奉行もふその常より十六七人より減る
ことこれ一申比社儀を法前元又由ありしと云
評定元始より將軍家の由前より於て奏事此
段を勤免由沙汰始れ時ハ披露を以て沙汰此
披露段段は其ふとの由あり其外引付元より
ともいふ恩賞方に加へらるる又是るての

を以て人の由おの役小使事せさるる故小使礼代と法前

未系元といふ

武評定元ハ武評定始由判始由沙汰始等其時
は初より着座引付元の上小使りて沙汰の技藝

をも致すことかれと為小使以下此公事代を以せさるるもの形ハ
恩賞方小加へられは武評定元と稱するといふれ是も尚武評定
元條を系考とす一又いす恩賞方より着座せさる引付元も政和
内法ハ恩賞を以ると同く公事代技藝を以てたかといはる

安堵奉行

新編式目追加云未所分所領配分事

延應
四三

十六云相論之是非云得分之多少始終於引

付可有其沙汰其訴狀等者安堵奉行可

賦之同御下文施行事以配分狀可付安堵
奉行人御下文被成下者安堵奉行可下于
給人

太田康有記云建治三年二月廿九日備中

前司行有被仰安堵奉行

按行有評
定元かり

北條記云道嚴攝津入道弘安元年二月加

評定衆永仁三年為官途奉行同四年為案

堵奉行同六年二月廿八日為越訴奉行

新編式目追加云未所分跡御下文事 二應

五遺領配分之後被返遣安堵奉行人之條

不可然自今已後引付奉行人可成御下文
歟

二階堂系圖云盛綱攝津守安堵奉行盛綱

弟政雄能登守評定衆安堵奉行 按盛綱政雄
ハ康有記

入る一行者ハ
後祖兄弟カケル

又云時藤備中守安堵奉行越訴奉行 按以上
六條ハ

徳念持軍家
の事ハあり

建武年間記云奥州諸奉行政所執事山城

左衛門大夫評定奉行信濃入道寺社奉行

安威左衛門入道薩摩掃部大夫入道安堵

奉行肥前法橋飯尾左衛門二郎 按以上一條ハ
建武の新制

マテ徳守ノ厨下並ナリ一ノ司ヨリテ
詔ヲ大御軍源顯家ニ被答アリ

建武式目追加云文書紛失事評定事 貞和
二因

九廿七
評定 可為内務方不務之由先日雖有于河治

於建武三年以前未嘗有書之間委細之
旨孰多據此明欵任先例乃同尚知行之實否
於此證人等去須成賜給矣安堵下交至
同年以來分者有舊規於事書立不恩賞方
問注可有之沙汰焉按前事書之可及政所
の記録をいひ及ふ不
恩賞方安堵方問注不
三方其記録をいふなり

花營三代記云當知行地安堵事應以一同
之法被下宣旨之上者重不及沙汰但依諸

人之妨有愁申之輩者尋究當知行之所見
披見文書正文所申無相違者載名字可給
安堵此上若雖段步以不知行之地寄事於
安堵令掠領者隨支證出來可被沒收本領
無所帶者可斷罪其身非罪科輩者當知行
地充給他人事相傳支證難被默止者雖為
恩賞地可被返付之只有當知行之號無指
由緒又其身非朝要之仁者依事可有用捨

按此制ハ建武の一統ニ公家ト出スル法度ヲ適用
シテ其ノナリテ事建武記トスルナリ文章此
旨趣大概お頼セリ但彼記トハ出スルナリ
一同此法を以テ示シ載シテ其統ハ本領安堵事開後
餘流并累代お傳々仁事故被收公者其尋究文書
道理可省勅裁陸帯根本券契相承不明不可
及沙法文治建久以來恩給之地知行令中絶志
回沙法之限但人々為要須志宜在臨時聖断
トあり庶安ト必忠法を適用シテ之を
爲小ノ事持院殿武位或掌院之レ一故諸國全ク
静謐ノ属を以テ不乃公家武家トハ本領安堵を
歎許ス不乃之多く其條終究トシテ其司其事務
繁雜不堪ナリけは建武の制ニ准シ朝廷小
中一ト一同此法以施行一安堵此許以を絶
形不ハ一以時より安堵を以て停止セシメ
やむ不トを以テ安堵の事ありハ其會て内法方の意

うけ給ふる事トナリトスルナリ
次有る政所内評定記録以参考トナリ

政所内評定記録云寛正二年九月六日内

談着座頭人諏信州松丹州飯左大開治河

飯兵大齋四右清式齋大齋五兵諏左將披

露條々一越前國社庄福聚庵安堵奉書事

治一尾張國大鷹郷大梅院被申安堵事清式

一物部左京亮申安堵奉書事諏左即被成

下畢已上七箇條餘四條三年十二月八日

披露條々一三河國三橋錢屋與新善法寺
雜掌相論同國稻束平尾内負物下地事河治
於當知行在所者不可有相違之由被成御
奉書有子細者訴人以參洛可申上之中一
澤彌六事一被成下安堵御奉書畢以違
背篇也六年四月十日内談頭人誣信州飯
左大清泉飯兵大齋民齋五兵誣左將松丹
州治河齋新左齋四右齋大清四左松主披

露一嵯峨保宗院永代買得安堵事清泉依
為別奉

行不能賦一圓如庵安堵齋民自治河一日野北

小路殿鶴御新入買得御安堵將各可被

成奉書云々按政所内法小公事其披露を致すハ

系於軍家の
奉行強利

按安堵とは本領の地、安堵するは小

してたとハ時世に轉變し河一系も猶古に

如く父祖の所領を知行するといハ里或々

之く中絶せし舊領ありて返揚

しつを多し不領安堵といふ 史記の言祖不紀し
案堵如故云々

有り漢書ふを按堵は作まりて二史は
注を按堵ふ吏民の牆堵を次方とふ故の

如く遷都せりて此の事ありて元全く
そをいふを但多くは安堵の字は後い案堵

は作りの事なり異邦ふと
をく安堵の字は用るる有りといふ

武家何れも不領安堵は時にそは強として
御教書にいふ下文を書字を素く揚はふ

流例はしつ常ふそ文書を直り安堵

といふ安堵下文安堵御判ふとも称は

又寺社領地を將軍家代始志度毎に

判物を下りたる事してふも亦安堵といふ

上件の事は皆安堵を以の主職としてを以

する所はいふりて外父祖の領邑を譲らば

子姪妻妾等に分配知りてふ或もはを以

うけ給たり御法する所ふそ凡熟習ある者

新に治るる領地をば新恩といひて恩賞

奉行の地を奉行し安堵の地を安堵奉行の志
沙汰する事あるに諸家此領邑寺社村田
園等へていふ奉行の地つらうはらハ形一
建武の新制にて諸府小諸奉行を置けし時を
安堵奉行の地にて恩賞奉行なりしハ當時幕府に
恩賞方減定並まじり五畿 鎌倉村世に奉
仕の地をふる沙汰し安堵
許言流する事い奉行をうけ給よりハ
足利殿の時おもたう其例を返れらるへ
さて恩安に玉りて不領安堵の制令を出

さき舊領の地も久しく中絶して蹤跡
分りあらず不領又故ありて一度没収せし
まし領邑等此類を後年款訴を致し
いへも容易に返賜する事き定となり
安堵の沙汰多かりりハ別々此奉行を
置るに及らすなむて引年百忠奉行
まらりしは但元より引年方を安堵
沙汰し領邑ありしと安堵をハ安堵

奉行此うけ給ふる事なりしと爰に至りて

更し引身小附屬せしめし事

賦別奉行 又稱賦奉行

新編式目追加云未處分所領配分事 延應四三

六云相論之是非云得分之多少始終於引

付可有其沙汰其訴状等者安堵奉行人可

賦之 按訴状を賦する事同注不此所職ふれと安堵此

事しはききむり訴以ハ安堵奉行人をして賦せしむる法哉
定免しる事

新式目云諸人訴訟同状事 正應三十九 訴状為

非據者不可賦之由言付同注凡即時可朱

所教書之者言作之方引身事其人歟

新編式目追加云充給總領跡混領庶子分

事 正應三十一 惣領主有罪科之時以別人令改

補之處庶子等稱不給御下文無尋決知行

實否頃年被付惣領之條甚為不便之儀歟

各別領知證據分明者縱雖不帶安堵御下

文於本引付重有其沙汰可返付之由被仰
下之後三方引付奉行人被結改畢然者雖
非本引付於奉行人現在之方可申沙汰但
無奉行人事於三番分者頭人依無相違猶
於本引付以他奉行人可糾明於三番者不
被改頭人至四番五番者止其方之畢彼三
方者自問註所可賦出引付方也
庭訓往來云讓狀謀實越境相論未分甲乙

之次序舊代相傳之重書等者於引付方
可被逐沙汰頭人上衆圍同右筆在行人
等雖有終日沙評定窮屈更無由休息被勅判
就同注所賦圍同重賦也執筆書與同狀奉書於
訴人之時及有度之者行使而之下不符就遠背
散狀者直被下知訴人令不進之時及有度討下
訴狀番三問若訴陳於沙汰遂對交任雌雄
是非存行人之取於奉書於引付身窺法評定

吳見不令成敗也

沙汰未練書云賊奉行トハ家初不解状ヲ
上ル奉行不也關東ニ波羅在之

又云不替沙汰トハ不領之田畠ト地相論事
也於引身有之沙汰不替取論子出牙者先
調辨状具書不替紙可上之賊奉行請取之
紙双紙ニ沙汰之篇目ヲ書付テ辨状ニ加銘
追次才下方引身ニ賊之其開闔請取之於

引身沙産以孔子定奉行奉行治定之後
御教書ヲ成也以此為辨状之初云

德倉將軍家
の奉行なり

建武武目追加云一奉行人直請取辨状披露

事正長二
八廿論人出帯之時參差ニ沙汰出来之

条不可然向後志上裁并賦別奉行之外所
被停止也各可令存知矣一諸人辨状ヲ

一正長二
七廿二以賦日限次才奉行人可伺申之焉

被_レ_レ出_レ一諸人庭中事永享八致訴_レ以_レ事名

中清_レ試可_レ身_レ事_レ以_レ不_レ處_レ多_レ右_レ右_レ企_レ庭中_レ條

自由_レ之_レ至_レ也_レ但_レ雖_レ中_レ試_レ令_レ遲_レ者_レ中_レ次_レ之_レ族

或_レ緩_レ忘_レ款_レ或_レ顯_レ負_レ款_レ屬_レ別人_レ申_レ之_レ尚_レ延_レ引_レ者

於_レ庭中_レ言_レ之_レ以_レ之_レ非_レ急_レ之_レ類_レ同_レ等_レ不_レ經_レ次_レ身

撰_レ於_レ庭中_レ之_レ一切_レ被_レ停止_レ訖_レ焉

康富記云嘉吉二年十一月廿九日丙戌清

大外史之訴訟河内國更占冰室吏者遣召

文於結城方畢小川事者遣召文於和田國

分方之處件和田國分者當管領之被官人

也當職之時者内者吏不可成召文之由賦

奉行飯尾六郎左衛門咎云々此事不謂次

第也雖當職之被官人爭可畧訴訟哉不可

說之由奉行等一揆謗之云々

政所内評定記錄云寬正二年六月廿五日

内談著座頭人諏信州松丹州飯左大治河

清泉飯兵大齋四右齋五兵諏左將一久我
大納言家雜掌申治河久我殿者別奉行家
領播州石造之内近安名者下河原門跡領
也然代官職事今熊野牛枕庵江御契約之
處公用懈怠之間有改易久我殿江被預申
之處彼牛枕門跡之借物相殘之由申在所
ヲ不去渡云々可被成御奉書云々一岩崎
平次郎高則申賦充所諏左將但當座醍醐
披露齋四右二与奪

妙法院領丹波國朝來村代官職事中可被
成御奉書云々以上披露已後三獻九月六
日内談著座頭人諏信州松丹州飯左大開
治河飯兵大齋四右清式齋大齋五兵諏左
將披露條々一明林中借錢與合錢對津田
相論事諏信一御料所小吉野事飯左大一
越前國社莊福聚庵安堵奉書事治河一六波
羅岩坊與平野神主相論事番之飯兵一南
大齋四右

禪寺東禪院莫端首座被申間事右齋一尾
張國大鷹鄉大梅院被申安堵事清式一物部
左京亮申安堵奉書事即被成下以上七箇
條三年正月廿六日內評定始三月廿三日
後內談始一天龍寺澄紋申香巖院領佐味
莊事主職事清泉依被成五箇年之補任度
過分立御用之處不能御返辨背補任之旨
改易之條不便也可被遂算用之由申之自

管領就被仰候公方江披露之處此分當所
江可申之由被仰出之可有如何之由披露
之仍不及賦之意見被成召文可被遂算用
云々十二月八日披露條々一三河國三橋
錢屋與新善法寺雜掌相論同國稻東平尾
內負物下地事治河此一箇條者依為社家
被執合間不能銘者也於當知行在所者不可有相違
之由被成御奉書有子細者訴人以參洛可

申上之

按新法寺は石清水の祠官よりを以て
社家より飯尾左衛門右衛門尉を待てし

合寺の事ありしを
沙汰す

六年四月十日内談披露一

嵯峨保宗院永代買得安堵事

清泉依為別
奉行不能賦

一圓如庵安堵

齊民自治河
當座ニ與奪

一日野北小路

殿鶴御料人買得御安堵各可被成奉書云

云

按以上三條ハ系於
將軍家ナリ

按賊別奉新者同注所ナリ人ナラキナリ

給事不賦ナリ賦事系所配當志意ナ

してけを新たる者ハ吏民訴認此事ありて

訴状をもち給時ニ給を交とるニ状ニ給を

加へしりて五方引身ニ賦して給を沙汰さしむ

友ナリ賦別奉行賦事新等給給何リ

六年月日と申新の姓名を
状志表ナリ略書ナリをいふ

同注不引身方恩賞方安堵方等

引身以下ハ
皆改新の

被後 各系掌ありといへり同注所ハ給を

以て之ノ主職とするナリ何れノ訴認も之

かつさるハ水一取ノ苗不の事行を以テ
 賦をつらささる志むる定格となり一ある
 竹所より訴論の沙汰をいすといへどもされ
 武事を主職とするあり非違檢断拷問決罰等此
 事をつらささる常日れかく配の事行を定む
 訴訟よりかつさる
 事ハ志とよ裁判の事行をして私曲志
 沙汰ならし志むる人爲に備とるえり
建武
武目
 追加之事行人直傳取訴状抄寫事参考
 沙汰出来し條不可然向後去上裁并賦列を以テ
 外取停止也と
 巧を以てさる

披露奉行

吾妻鏡云寶治元年九月十一日辛酉筑後
 左衛門次郎知定捧和字款状是愁漏合戰
 賞事也左親衛數返披覽之知貞既迹獲麟
 之一句何無其沙汰乎仰勲功奉行人等究
 淵源之後可披露評定次之由直令示付諏
 方兵衛入道給
 又云文永三年三月六日己亥諸人訴論事

被止引付沙汰問注所召整訴陳狀可勘申
 是非也前々被記申詞之間為被賦九人評
 定衆所被結番也御評定日々奏事結番一
 番三日十三日尾張時章入道見西越前前司時廣
 宮内權大輔時秀伊賀入道時家道圓和泉入道行方
 行空二番六日十六日越後守實時中務權大
 輔教時出羽入道行義道空信濃判官入道行忠行一
 對馬前司倫長三番十日廿日秋田城介泰盛

廿三之卅四

維殿頭師連少卿入道景賴心蓮伊勢入道行綱行願
 一番衆一日十日二番衆五日廿日三番衆十一日廿日
 五政所問注所行實康有兩執事每日可令參也且自
 問注所每日可差進文士二人也按本支々々九人評定元
云々とありて交名八十四人なり只少々毎々三人の外々
依職なふへへ又按は時引付沙汰を止免へうと
同六年より至て又
これを獲されし事
 北條記云永仁元年十月止引付置執奏時
 村道鑿師時惠日宗宣蓮瑜宗秀等也十月

又置引付頭人時村道鑒道西惠日蓮瑜十月引付を復さうふといひし師時宗宣宗秀等ハ尚奏事役をうけ給とてしとをさうり又さうり載ふ執奏七人の内時村云とて家合元なりと傳ハ評定元とて

又云宗宣弘安十年十月為評定衆正應元年十月七日任上野介永仁元年七月為小侍奉行同十月止引付執奏諸人訴訟同四年正月為引付頭四番又云道嚴攝津入道弘安元年二月加評定

衆永仁六年二月廿八日為越訴奉行正安元年正月六日加奏事人數乾元元年九月十一日為八番引付頭按以上二條を總念右軍家行なり但し條記ふを按る所の目ふといひてし執奏を以て奏事といふとてふは條記を以てさうりといふのいふか後按よのこり

御評定着座次第云文和三年五月廿日寶篋院殿御自筆御記云評定始又三方内談始也今日評定當參石橋左衛門入道心勝

仁木左京大夫賴章朝臣佐渡判官入道道
譽土岐大膳大夫賴康二階堂大藏少輔政
元問注所美作守顯行披露奉行楢原左近
大夫也 按評定始了の奏事といひて披露奉行
と稱すは常日此稱呼あり
也

又云至德二年二月十二日御息沙汰御座
管領義將朝臣二階堂中書禪行照問注所
刑部少輔長康波肥通郷松丹貞秀飯濃入

新加
初叅披露奉行人松田豐前守雅樂備中守
飯尾肥前守齋藤五郎左衛門尉同十七日
仁政御沙汰御座管領義將朝臣二階堂山
城中書禪問注所刑部波多埜肥州松田丹
州飯尾濃入披露奉行人飯尾肥前守雅樂
備中守飯尾善左衛門為久松田主計允
又云明德二年五月六日御沙汰始御座管
領右京兆二階堂山城中入行照攝津左能

秀問注所越長康波多野肥通鄉松田丹貞
秀奉行人飯尾左衛門大夫飯尾肥前守雅
樂備中守飯尾美濃守治部四郎左衛門尉
中澤次郎左衛門尉 按了了奉行人之可及
即被處事之可及
建武或目退加云奉行人伺事規或 正長二
八廿
一出仕各了結番之次了了令系勅但於急事
者雖為非番可申之矣一條數事不了也
三之條玉不足者不及被定並焉一時尅事

可為已刻於以後者可令略矣
又云奉行人直請取訴狀披露事 正長
二八
三論人出帶之時急差々沙汰出來之系
不可然向後者上裁并賦別奉行之外所被
停止也各可令存知矣
康富記云嘉吉二年十一月廿九日丙辰向
布施民部大夫貞基亭西京隼人町夏去年
十二月及兩度致披露重又可有披露之由

令催促了相奉行飯尾肥州禪也兼可申之
由返答

季瓊日録云長祿二年四月十三日雲頂院
領披露奉行以飯尾下總守定之

又云寛正三年七月廿八日今日以赤後雖
可有諸奉行之披露支依諸奉行今日御憑
之前日伺否之支不覺仍今晨被閣披露支
也奉行不記得之旨伊勢守披露之八月九

日花頂殿訴訟依飯尾美濃入道違例以兵
衛大夫可致披露之由被仰出仍命于兵衛
大夫也十月四日東福寺領熊坂公事重披
露之飯尾美濃入道出仕之時可致披露之
由被仰出也

卷川親元記云寛正六年七月朔日丙午以備前
奉之由狀就富士多於大輔入乃確執後由注之
同彼方書狀趣即亦後以郎右衛尉令披露了

父子確執事以寫不及由弘明被成下涉教書
奉書以尚以宜成由成敗以以肯了以由意信
六月廿六日福島修理亮及貞親今河法親大輔及
以狀也涉教書
日射今河及由狀同之方法注之各披之經存以
仍存於人即今披經以乃之成下法教書兼有書信
早任涉成敗之有之涉法以亦忘之六月
廿六日譯上富士多於大輔及伴勢子
并孫親基記云文正元年二月十七日由前出涉法始

涉度爰飲洒掃雪禪因州何事次才野州貞基
玄良以上武評定也忌
賞方忌序未涉免 禪信州忠鄉松丹州秀興
肥州之種清泉貞秀飯之大貞有飯和元連
齋四右種基親基齋五玄豐基飯四左為衛
依歡樂不系元治河國通飯新左為備按何
事云
即披流在
以系有
卷川親元記云何事結番之次才文四十六
二十五 一番
清泉祥為飯濃朝松對秀飯三右為二為布

野州英基飯左大為長飯加清三番赤上州豐飯

三左脩為中備元口番清侍中秀松豐貞飯

与三左規為五番清式大元諏信貞松左大長

惠林院殿將軍宣下記云延德二年七月五

日丙辰宣下同時可被執行御判始之旨被

仰出之略中次御前御沙汰始恩賞方衆號御

出任一列伺事在之御座管領因州加州肥

禪發言對州加州飯御寄進奉行兼連最前伺

之披露状山城國上挂薦淵跡名田畠事石

清水八幡宮可被成御寄進御判也御前御

前御寄進地伺中事文明御判始時兼連叔沙汰

父近江守任連伺申之云不知先例事也

次一列伺事條數各一个條披露様同奏事

人數打裏清式部筑後守元定松田丹後守長

秀諏方信濃守貞通齋藤大藏入道玄茂紺直

垂中澤備前守之綱飯尾左衛門大夫為規

飯尾筑前守種貞雜賀民部丞高行清式部
四郎左衛門尉貞數飯尾兵衛大夫春貞齋
藤民部大夫宗基松田左衛門大夫賴亮飯
尾近江守貞運松田主計大夫英致飯尾三
郎左衛門尉為完諏方左近大夫貞說飯尾
彦左衛門尉行房飯尾次郎左衛門尉為賴
矢野長門守貞倫一昨日新加貞通申文住吉社
雜掌申加賀國有福莊檢注事任先例可被

成下御教書矣延德二年七月日貞說申狀
石清水八幡宮雜掌申長門國福富莊檢注
事任先例可被成下御教書矣延德二年七
月日各如此但依人、意巧神號文章相違
之一列披露之後肥禪起座於圓座伺申之
申狀歸座自己之伺事、申意見請同了次
懷中對州以下伺事請意見乞同歸座
建武式目追加之伺事條々
永正八
十二六
一才
結書

之次才各可令奉勅也。訴陳之儀為巡番先
一々条了伺申事。但訴陳之儀乃子細多逗留
者自余之伺事可斟酌仕一非
急事者非番之掌可斟酌於_下儀出_上子細
去_レ及是_レ非事一被作出返_レ子細指急_レ
者尚番可伺申事。

蜷川親俊記云天文七年十月十七日丁亥法料不
之事披露事仍_レ所_レ十一月廿七日丁酉富田
新右衛門入道P事披露方伺_レ之_レ就_レ以折紙可

P_レ之中_レ同如此類等之十年十月十日為膳院_奉
版_レ与安_レ后院_奉新_レ飯
和_レ与安_レ后院_奉相_レ瑞_レ事_レ儀_レ以_レ此_レ披_レ露_レ在_レ之
為膳院德利云々

光源院殿御元服記云天文十五歲十二月
廿日若君義藤朝臣征夷大將軍從四位下
禁色昇殿宣下有之同日新將軍御評定始
御判始等有之御評定始闈役松田九郎左
衛門尉賴隆奏事飯尾大和守竟連御判始

奉行松田對馬守盛秀御前御沙汰有之御
吉書始有之新將軍御着座人數定賴朝臣
二階堂中務大輔有泰朝臣町野左近大夫
將監康定松田丹後守晴秀今度始而被元
召加處也
造朝臣也康定御硯目錄持叅御前之置
歸座三色御合點有之康定座ヲ立テ二色
取テ退又着座堯連出テ三社ノ支披露發
言晴秀各合點ノ氣色有テ堯連退出次二

評定衆下臈ヨリ皆退出

中畧○梅以
上評定始有之新將軍

又御出座定賴朝臣以下評定衆如前各著
座以前ノ處ニ御圓座一有之其上ニテ各
令披露次第飯尾大和守堯連松田對馬守
盛秀飯尾彦左衛門尉盛就中澤掃部助光
俊松田九郎左衛門尉賴隆松田次郎左衛
門尉賴忠其次座ヨリ晴秀出テ披露又着
座堯連盛秀ハ大帷子ヲ脱テ各奉行衆ノ

如く裏打也評定衆又下臈ヨリ退出按以上

沙汰
始ふ

按披露奉行ハ恩賞方内引身元ある事ハ
うけ給くる所職ふ凡ハ奉行方事ハ評定
始時奏事乃役ノ後事一法前沙汰始
了ハ公事披露を以て幕下此事を
伺て許可を乞ふて之事以て之れハ
皆規式ノ法きある職掌あり常日ハ評定

以下此公事沙汰して幕下此聴達一又
許可を乞ふて裁判を乞ふ事ハ爰を以て

披露奉行と稱一又此奉行の名は以はる
恩賞方

子加えたる引身元及政所奉人等ハ政所内評定始
内該始ハ孔子奏事等此役を勤免公事披露を
いすすみたる事ハ法前此奏事披露を役と
ことを以ていふ由る由未元あり此奉行の事ハ
既ニ恩賞奉行 初極念殿の時ハ披露奉行
條ノの由り

此等別ノ定並ハ一ことハある事一ハ永仁中
志もしく引身元を止免られ評定元奉念元等此

内より奏事忠職を立れ公事一被_レ爲_レを
役とし又福似く引身を復され一時於奏事
を公廢をすして更_レに設_レをれしより其れを被_レ爲_レ
奉行に濫觴ともいふなり
但本條より引_レて奏事
の事ハあるて評定元
家合元の内なるは是利家被_レ爲_レをれし六階級を卑
あつては史由まこといふ時も引_レて元の内より奏事は
加_レしと_レし者
有_レしあるへし
被_レ爲_レをれし程をい_レて_レなり
或評定元も
規或の被_レ爲_レを
勤むれと常日祈_レり下_レるて公事被_レ爲_レをれし
勤仕とさう友は被_レ爲_レをれし内より加_レしとす

問注奉行

吾妻鏡云元暦元年十月廿日乙亥諸人訴
論對決事相具俊兼盛時等召決之且令注
其詞可申沙汰之由被仰大夫入道善信仍
就御亭東面廂二箇間為其所號問注所
按
信建久より至て問
注所執事と似る
又云仁治二年五月十日丁酉江民部大夫
以康問注奉行之間就有非勳之咎被召放

所領一所訖三年十二月十三日六波羅御
沙汰之間問注奉行人緩急遲參之由依有
其聞定時尅令着到之每月可進關東之旨
被仰相州之許

又云寬元三年三月卅日乙丑諸人問註
被差奉行人之處一方遁避之由間依有其
聞自今以後相觸奉行人之處可註交名就
彼狀可有誠沙汰之由被仰出加賀民部大

夫奉行之十二月廿五日丙戌松浦執行源
授被召籠其身上野入道日阿所領守護也
是與鶴田五郎源馴就肥前國松浦莊西鄉
內佐里村壹岐泊牛牧等相論事授非據之
餘以馴令惡口問注所奉行人越前兵庫助
政宗之由構申無實之間被尋證人之處太
田太郎兵衛尉康宗志村太郎入道寂圓進
誓文不令惡口政宗之由也仍於馴領所者

任當知行不可相違之旨被仰出中山城前
司盛時奉行之

又云寶治二年十一月廿三日丙寅問注奉
行人等閣雜務誓古酒宴放遊為事不面謁
訴人不見究證文理非之間臨評定座之時
預下問事等所答申頗令停滯於如然輩者
不可召仕之由普可相觸之趣今日被仰付
太田民部大夫信濃民部大夫入道行然等

後十二月十六日巳未諸人訴論事於申沙
汰條數多々之奉行人者可有御恩之由今
日被觸仰之

新式目云一故武藏入道沙汰之時有法成敷
事寬元二廿八條之評定事書內訴人云魚物
之押書者彼可遂問注由隆有書下今更不及
召決之旨遍下被觸奉行人等之由可被仰下
問注亦款一問注難滋事奉右於是國去被下

右文之後學故至于五ヶ月百六不系決者就
訴人中狀可有之沙汰至正小者右文日限
可有沙汰也次為方系對之後遁問注
元之也二ヶ月二十者不遂之旨也其由成敗
也者依仰下知如件建長七年辰十二月廿九日
お掇方陸奥守

又云引舟元英舟行事弘安七五
廿七評右引舟忠否
舟仍曲直頭人不憚于人不及緩怠遲々可

注申也引舟外舟仍人政所問注而執事可申沙汰
矣按引舟外舟仍人といふは引舟元小補をうけざる政所
問注而の爲舟人をいふは執事を退を更る者なり
庭訓往來云問注所志永代沽券安堵年紀放
券奴婢雜人券契和与狀負累籠文等謀實
乳明之爰依舟人右等舟仍人等評判也

按問注奉行ハ訴論ハ旨趣以問為してP詞を
注記以不注子カレハ其職掌輕々以益念
右大將家武家中興のこしめ三右康信をして

之職了定充られ文よさるべき事あるを隸して
問注の事を奉給せしむ康信元より吏才
可程てそ任に堪ふる友形に建久は初五司乃
職負を定むる不及て康信即問注不執事
補せらるるは隸属せしむ被爰此等家人と形を
更了之職不從事以て是即問注を形ある
之後人数を加補せられし由は往々舊記に云ふ
足利殿の時よ至ても前代よ形に充てられ

をさるるしと問注を形といふ稱は絶て云ふ
問注不家人問注所成ふところへ是凡形に
事可多時ハ先引身方より形に奉給人を
定免られしと問注を形に属して是名越を
礼明せし免之後形に形に多者問注を
是非を斟酌して此を沙汰する形に問注不
執事家人等其篇を参考し其
問注よ及とさる公事を云ふ引身方
より形に形に例も云ふられ阿也

但他の子
細阿也

武家名目抄第廿三冊

源忠常書

廿三之五十

